

アムスルだより

No.11 1995年 1月10日

Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所



〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

TEL:098-987-2304

FAX:098-987-2875

アムスルとは、阿嘉島臨海研究所のニックネームです



ホラガイの話

あけましておめでとうございます。
今年もアムスルだよりを通して、地元の皆様に、研究所の活動や海の生き物についてご紹介していきたいと思しますので、よろしく願い致します。

新年早々ホラをふくのは良くありませんが、今回はホラガイについてお話しします。ホラガイと言うと、山伏がふき鳴らしたり、戦いの合図にも使われていた大きなホラを思い浮かべる方が多いでしょう。ホラガイは貝殻の長さが40cmにもなる、表面に山鳥の羽のような模様のある肉食の巻き貝です。紀伊半島以南の、太平洋からインド洋にかけてのサンゴ礁の浅瀬にすんでおり、身は食用になります。沖縄では、この貝殻に木の柄を付けて、お湯をわかすのに使っていたそうです。

以前にご紹介したヤコウガイは、外見では雌雄がわかりませんが、ホラガイは、雄の貝殻が細長いのに対して、雌の貝殻は丸くふくれているので区別できます。ヤコウガイは、水中に卵と

精子を放出しますが、ホラガイはどうでしょうか。1990~1991年の冬には、研究所の水槽で、ホラガイの交尾と産卵が観察されました。ホラガイの卵のうは、長さ約4cmのウリ型をした透明なゼラチン質の袋で(裏図)、一つの卵のうの中には直径0.4mmのオレンジ色の卵が3000個ほど入っていました。1匹の雌が、11月には20個、1月には442個の卵のうを、水槽の壁面に3日かかりで産みつけました。卵を守るためでしょうか、この雌は産卵した後もずっと動かず、卵の上におおいかぶさっていました。

受精した卵は、卵のうの中で幼生になり、2ヵ月以上もたって、やっと卵のうから出てきました。ヤコウガイが、受精してから1日でふ化して、数日で稚貝になるのに比べると、とても長いですね。大西洋のホラガイに近い種類では、ふ化した幼生は数ヵ月もの長い間、水中をただよった後、岩礁に着生して稚貝になると推測されています。ホラガイのふ化後の生態については、まだわかっていませんが、いずれ明らかにしていきたいと思えます。

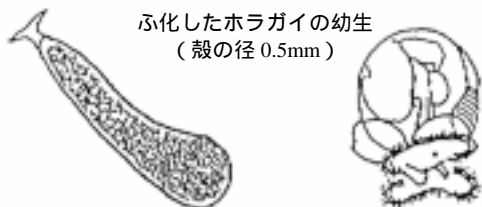
ホラガイはサンゴを食害するオニヒトデの天敵として有名で、ホラガイを

採りすぎたためにオニヒトデが増えたという説もありますが、これはあまり確かなことではないようです。ホラガイはオニヒトデ以外のヒトデでも食べますし、1匹のホラガイは、1週間にせいぜい1匹のヒトデしか食べません。オニヒトデの駆除のために、ホラガイを増やして放流してみてもいいという意見もありますが、あまり実用的とは言えないようです。ホラガイは他の生物が見向きもしないヒトデを食べることによって競争を避け、サンゴ礁の生態系に適応しています。同じように、薄い貝殻にウズラの羽のような模様のあるウズラガイは、ナマコを食べることによって競争をさけています。これらの貝も、サンゴ礁生物の一員として、大切に见守っていききたいものです。

阿嘉島の海より

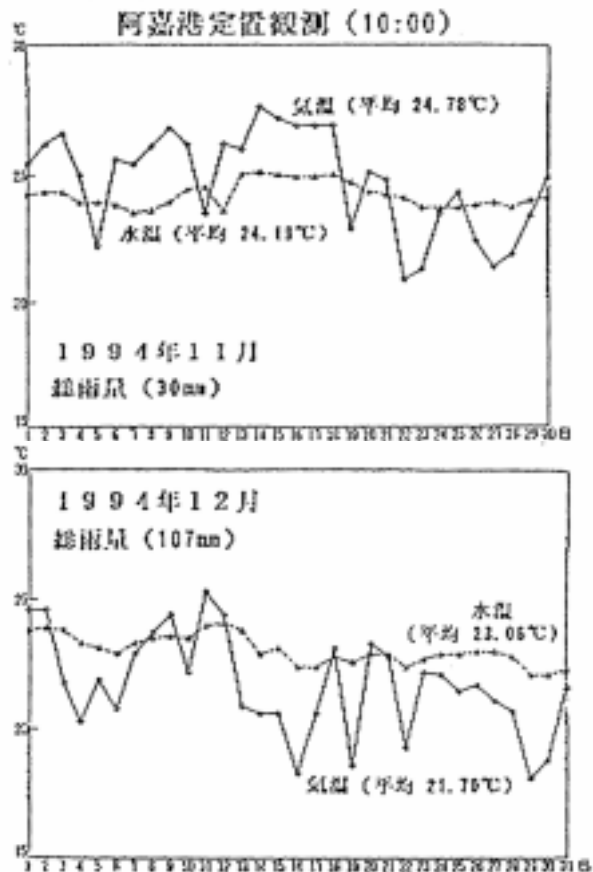
-ウミガメのふ化-

1月5日、地元の人が、クシバルの浜で海に帰れなくなっていた生まれたばかりのアオウミガメの仔ガメを、研究所まで持ってきてくれました。その後クシバルの浜を調べてみると、他にもふ化まじかのアオウミガメの卵が見つかりました。普通ウミガメの卵がふ化するのは夏で、冬にふ化するの珍しいことです。しかし、他に座間味島でも何回か観察されていることから、慶良間では意外と多くの卵が秋～冬にふ化しているようです。これは貴重な情報ですので、ウミガメの産卵や卵のふ化を見つけた方は、ぜひ研究所までお知らせ下さい。



ふ化したホラガイの幼生
(殻の径0.5mm)

ホラガイの卵のう
(長さ約4cm)



-オニヒトデの駆除-

最近、慶良間ではサンゴを食い荒らすオニヒトデをあまり見かけなくなりました。しかし昨年末、阿嘉島の青年団の人たちが、オニヒトデ駆除をした時には、阿嘉島北部のクロジャキからギナにかけては、まだオニヒトデがたくさんいたそうです。オニヒトデの体の中では今の時季から卵の成熟がすすみ、初夏に産卵します。海に潜る作業は寒くて大変ですが、産卵前の冬～春に駆除するのは効果的だと思います。3月10日発行の次号では、オニヒトデについてお話します。